そうがく

（No. ６６）
R2.12.12 発行
現職研修委員会
総合的な学習部編集

修学旅行で考えたこと

総合的な学習部長　竹平　真仁

十一月の中旬に修学旅行に出かけました。

新型コロナウィルスの影響のため、見学地を奈良県内に絞り、例年の修学旅行ではあまり行かないような場所を訪れました。旅行初日は法隆寺見学の後、高松塚古墳、キトラ古墳、石舞台古墳を巡りました。美しい紅葉に囲まれながら、実際にその地に立つことによって、はるか昔の人々は、何を願い、考え、どのような生活をしていたのだろうかと、考えさせられることがいろいろとあった一日でした。

その日の夜のことでした。日本人宇宙飛行士、野口聡一さんを乗せたスペースX社の宇宙船クルードラゴンが、国際宇宙ステーションへのドッキングに成功したというニュースが流れました。

このニュースを聞いたとき、昼間見た風景や考えたこととの不思議なつながりを感じました。古墳の壁画には星が描かれていました。そして、約千四百年の時を経て、民間による宇宙利用という新たな一歩が記されたのです。古墳時代の人々が宇宙をそう捉えていたのか分かりませんが、現実を見ると人間というのはすごいものだなと思います。この進歩を生み出したものこそ、人間に備わった資質・能力でしょう。それは、環境に適応し、困難を乗り越え、より豊かな生活を実現していくための力です。

社会生活を一変させてしまうほどのウィルスの登場によって、多くの人々が苦悩しています。先行きが見えないことからくる不安は大きなものです。しかし、同時に多くの人々が、それぞれの立場でウィルスに立ち向かうために努力を続けています。

総合的な学習の目標である「探究的な見方・考え方を働かせ」て、「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」を育成することは、まさに予測もしなかった現実により、改めてその必要性が認識されたと言えます。

工夫を凝らし、コロナ禍だからこその実践を行っている学校もあると聞いています。コロナ禍もいつかは収束するでしょう。長い目で見たときにこの経験が、子供たちの生きていく力になればと思います。

新しい学びの形を考える

生活・総合指導員　六ツ美北中学校　廣瀬　浩司

十一月十四日（土）に、日本生活科・総合的学習教育学会主催の第二十九回全国大会（山梨大会）が、オンライン開催されました。午前中は、課題別研究発表として、五つのテーマ別に四名のコメンテーターの実践報告がありました。（裏面に羽根小学校の内田裕斗先生が発表された内容を掲載しています）

その後のブレイクアウトセッションでは、全国各地の参加者とオンライン上で意見交流をすることができました。コロナ禍で、新しい形の探究の形が求められています。来年度以降は、教師がチームとなって年度初めに年間計画や単元計画を作成することが大切であることを再認識する場となりました。

午後のシンポジウムでは、『「新しい生活様式」の時代の生活科・総合的な学習（探究）の時間』というテーマでシンポジウムが行われました。コロナ禍での小学二年生と六年生の実践を基に、社会全体が先の見えない今、どのように子供の願いや思いを実現するのか議論されました。探究の過程で、人との関わり方に配慮して行う「情報収集」や「整理・分析」についても話し合われました。シンポジストの國學院大學の田村学教授が言われた「探究の質を高めるためには、今以上に企業や自治体との連携が大切になる」という言葉が象的でした。

コロナ禍における対話的な学びの充実を目指して

羽根小学校　内田　裕斗

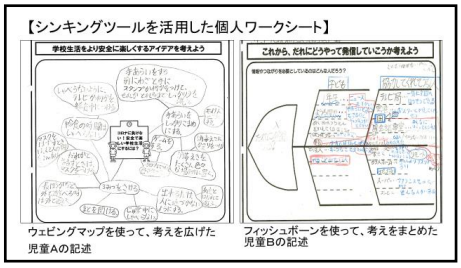
今回、課題別研究発表の分科会コメンテーターとして全国大会に参加し、提案発表をしました。

与えられた課題をこなすだけではなく、自ら課題を見つけ、探究していく力が必要であることは、休校期間の延長により明白になりました。また、答えのない問いに直面しているコロナ禍では、他者と関わりながら協働的に取り組もうとする姿が、一層求められるようになりました。ポストコロナ社会を生き抜くために必要な資質・能力とは、まさにこれまで総合的な学習の時間で尊重してきたことそのものではないかということが全体で確認されました。

発表では、特に制約が多い対話についての提案をしました。対話的な学びによって、身に着けたい資質・能力が「自己の考えを広げ深める」ことに立ち返り、自己内対話に重点をおくことで、充実を図ることができるのではないかと提案しました。

今年度五年生で行っている実践「われら、お困りお助け隊」では、「コロナに負けない、安全で楽しい学校生活を送るには」というテーマで、まず思考ツール（ウェビングマップ）を使って、考えを広げました。また、具体的な活動を考える場面では思考ツール（フィッシュボーン）を使い、浮かんだアイデアをまとめていきました。自分の考えにじっくりと向き合い、ワークシートに書く時間をとることで、意見交流で、自信をもって伝える姿や友達の意見から考えを広げ深める姿が見られるようになりました。

身に付けさせたい資質・能力を明確にすることで、対話的な学びの充実を図ることができるのではないかと提案しました。



ウェビングマップを使って、考えを広げた児童Aの記述
フィッシュボーンを使って、考えをまとめた児童Bの記述

学び舎の　総合耳寄り情報

恵田小学校では、九月末に学校田の稲刈りが行われました。学区の方々も参加し、四・五年生が中心になって進行しました。穫れたもち米を使って、十一月末の「収穫感謝祭」でもちつきをしました。恵田学区の温かさが感じられる活動となっています。

（恵田小学校　土井孝夫先生）

一年生は、ラグーナテンボスから二名の方を講師にお迎えし、テーマパーク内での仕事内容や働いている人の思いなどを聞きました。その二週間後に、実際にラグナシアに校外学習に行き、思いっきり楽しみながら、「おもてなしの心」をしっかりと学びとることができました。

（甲山中学校　阿部将人先生）

三年生一学期の活動として、「環境」の調べ学習を行いました。臨時休校中に生徒が感じたことを生かして、一人一人が環境に対して、『今の自分ができる方法を提案する』ことを目標に、用紙に書いて表現する形をとりました。自分や他者の発表により、多くの視点から環境をとらえ、関心を高めることができました。（岩津中学校　谷口定夫先生）

五年生は、毎年米作りを行っています。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もありましたが、農家の方に教えていただきながら、かまで稲を刈る、縄で稲を縛る、コンバインで脱穀するなどの作業を体験しました。子供たちは、「大変だったけど、やり方を教えてもらって、たくさんのお米がとれてよかった」と、「食」へのありがたさと感謝の思いをもちました。

（矢作北小学校　中村研先生）

六年生は、海洋生物が私たちの命や暮らしとつながることに視点を向ける体験的な学習を行いました。蒲郡市竹島海岸の生き物探索をした後、三谷水産高等学校を訪ね、海洋資源科の生徒が手掛けるウナギの養殖について詳しく話を聞きました。魚のことならどんな質問にも答えてくれる高校生の話から、海の恵みの大切さを感じることができました。

（六ツ美中部小学校　徳原雅治先生）